

南方文化講座

·

歷 史 篇

（省 堂 刊）

(出文協承認)
(あ 471033 號)

昭和十八年八月十日 初版印刷
昭和十八年八月二十日 初版發行
(八〇〇部)

南方文化講座——歷史篇——

◎定價四圓五拾錢
特別行爲稅 相當額 拾四錢
合價四圓六拾四錢

編者 三省堂南方文化講座刊行係

發行者 株式會社 三省堂
東京都神田區神保町一丁目一番地

印刷者 愛光堂印刷社
東京都赤坂區青山南町二丁目一六番地

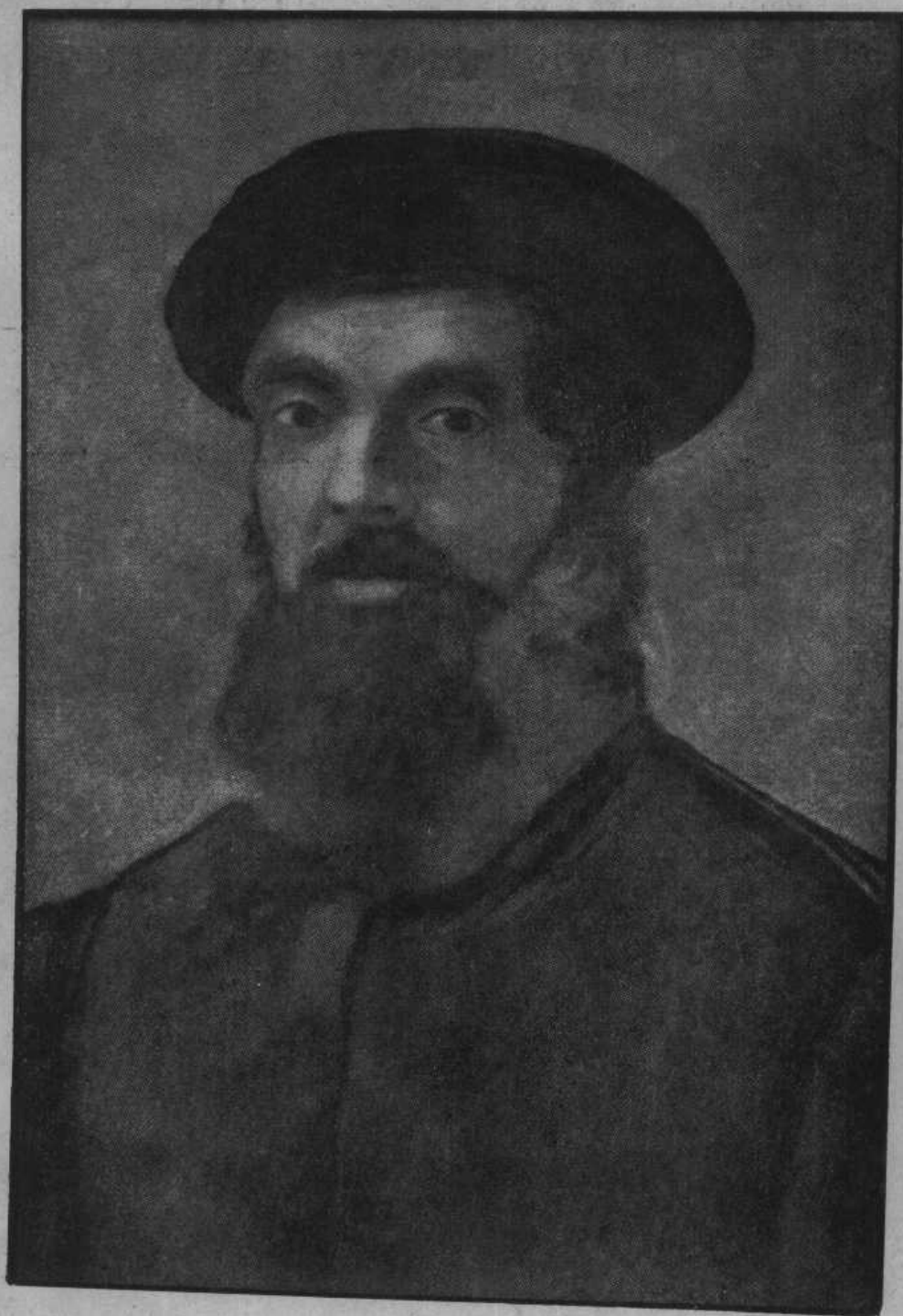
代表者 岩本米次郎
印協會員番號 東京一八號

發行所 株式會社 三省堂
東京都神田區神保町一丁目一番地
大阪市西區阿波座下通二丁目六番地

日本出版會會員番號 一一一五〇一號

配給元 東京都神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

— 南方文化歷史 —



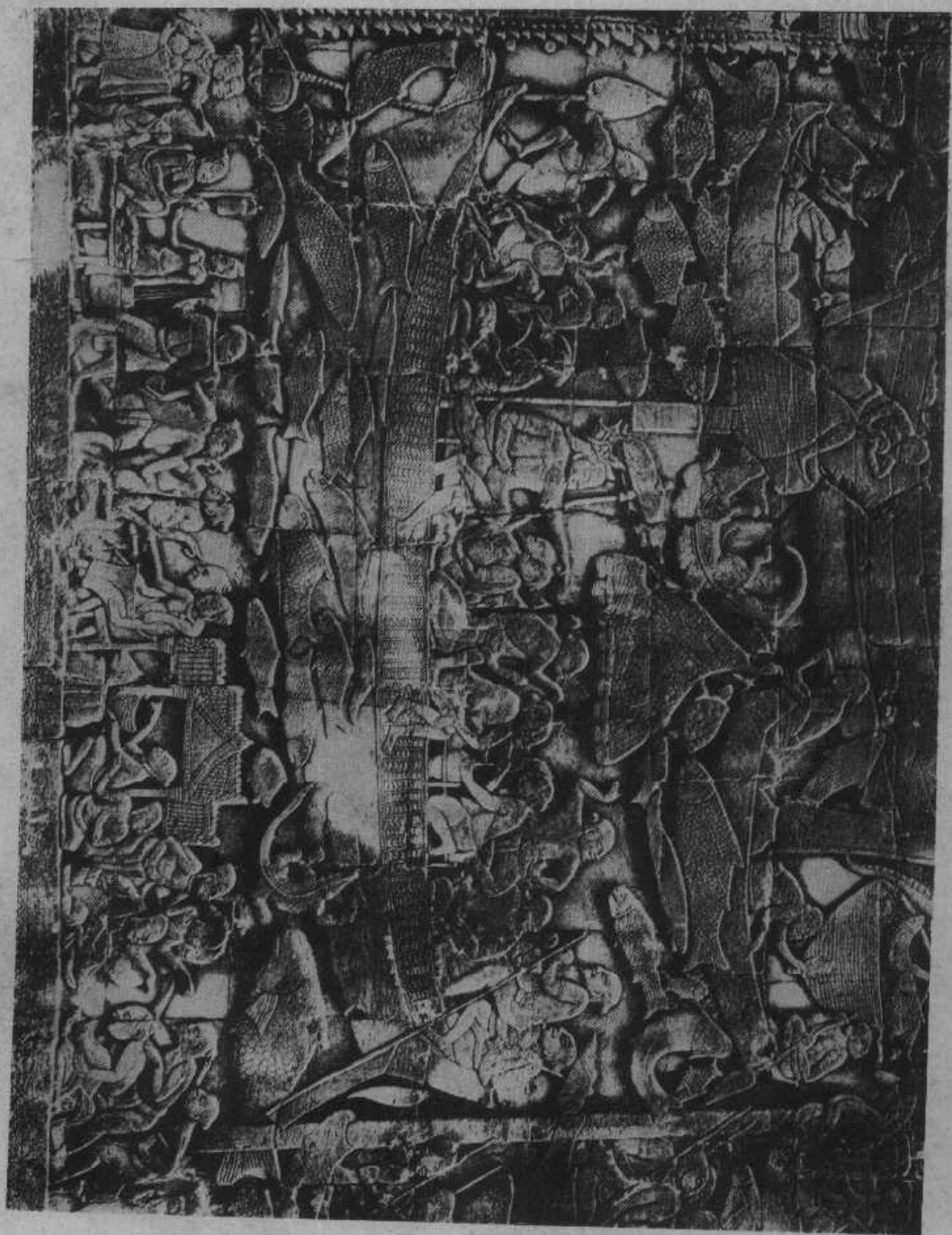
マゼラン肖像



Ein Stoltzer Javanischer man mit seinem Chingische dolichen auff der seitten dessen hefft oder
 andtlichen ist wie ein Teuffel. dan dayer so die neben gerissen nach ein rechten dolichen
 von Java Kommen. Contersailt ist Zu der rechten ist ein weib so Reijss gekauft und als haim
 bracht. Die Zur Linken Ist wol eine von den furnembsten weibern. Des Pfffers
 wehlt viel alda an den Cocos oder Nuclebeumen sie.

アユチャ王宮の廢墟





アメンホルトの壁畫に見る古代エジプト人の生活

序

歐洲諸國中最も早く南洋に進出したのはポルトガル、これに次いだのはイスパニヤである。ポルトガルは率先して東洋新航路の探検に乗出し、アフリカ沿岸を航進して印度に達し、皇紀二一七一年南洋の咽喉マラッカを占領し、香料の主産地モロッカ諸島まで進出したが、琉球の商舶はその七八十年前よりジャワ・スマトラの諸港に出入し、マラッカとは皇紀二一二三年頃より通商を開いてゐたのである。

イスパニヤがモロッカ諸島に進出したのは、マゼラン探検隊の残存船二隻がセブ島よりチモールに渡つた時からであるが、ポルトガルと香料諸島の領有を争ふことを断念して此島の植民に専念し、皇紀二二三〇年マニラを占領した時には、日本とルソンとの交通は既に開け、マニラには在留民が二十人あつたと傳へられる。

皇紀二二〇三年ポルトガルが我が國と通商を開始した後、船員補缺のため雇傭された者又は幸運を求める冒險家の、薩摩豊後肥前等の寄航地より、ポルトガル船に乗込んで南洋に渡つた者が少くなかつたが、その耳新しい歸朝談が一層國民の海外渡航熱を煽つたこと

は疑なく、中には年を経て航海に熱し、南洋航路の開発に役立つた者もあつたであらう。秀吉の外征は造船と海運業の發達を促進し、京都・堺・長崎等の豪商で、朱印を請受けて商船を呂宋・天河・東京・廣南・柬埔寨・暹羅・六昆等に派遣するものが出たのである。

家康は貿易の發展に一層心を用ひたので、朱印船を南洋に出す貿易商の數は急増し、島津・加藤・鍋島・有馬・大村・松浦・五島等九州の諸侯まで加はつて更に南進し、占城・大泥・荑萊・麻利加・麻陸等に渡航するものも出た。而して商船の往來が頻繁となるに連れて便乗渡航する者も多くなり、人口二三百乃至三四千の日本町が呂宋・交趾・柬埔寨・暹羅等に構成されるに至つた。その居留民中には、關ヶ原以來沒落した諸家の浪人達も少くなかつたやうで、その國の軍隊に入つて有力部隊を構成し、戰爭に臨んでは武勇を稱へられてゐた。一方貿易市場に於ても大勢力となり、特に暹羅に於ては、山田長政が政府の要職に就いてゐて貿易を行つてゐたためでもあらうが、鹿皮・鯨皮・蘇枋木等の主要物産は、日本在留民が先づ買集め、オランダ東印度會社の如きは僅に殘餘の劣等品を手に入れる有様で皇紀二二九〇年には商館閉鎖を決するに至つた程である。又蘭領印度總督府と契

約を結んでジャワに渡つた者の中、總督府に勤め或は城の守備に任じ、又は商業その他の業務に就いてバタビヤに居住したものが二百人内外あり、又少數であつたが守備兵としてアンボイナ・バンダ等の島に駐屯してゐたものもあつて、當時の南方發展は實に廣大な地域に互るものであつた。

皇紀二二五一年秀吉が勸降の使節をマニラに遣はした際、比島長官が武力を以て日本軍の侵入を防ぐ能はざるを認め、辭を卑く、禮を厚うして遷延策を講じた事、皇紀二二六九年マカオに於ける日本船乗組員の虐殺が因となつて、長崎港外に於てポルトガル船を燒沈した際、ポルトガルの印度總督が特使を派して陳謝し、貿易の繼續を計つた事、又皇紀二二八八年臺灣のオランダ政廳が、日本商船の同所に於て支那商人と取引を行ふことを阻止したため、濱田彌兵衛等が事を起し、延いて平戸蘭商館の貿易禁止となつた際、バタビヤの總督府が強硬手段に出づる能はず、時の長官ノイツを犠牲として解決を計つた事を見て、當時南洋に在つた歐洲政權が、日本を畏怖してゐたことは明瞭で、我が海外發展は年と共に盛になり、南方各地は遠からず我が勢力圈内に收められんとする情勢であつた。

寛永の鎖國はこの趨勢を一轉し、南洋は歐洲諸國の蹂躪に委せられたが、大東亞戰の勃

發するや御稜威の下皇軍の向ふ所敵なく、米英蘭は忽ち驅逐せられ、南方各地は三百年を経て我が勢力圏内に復歸するに至つた。然るに多年鎖國の間に往昔の深き關係は忘却せられ、開國維新後も同方面の研究が閑却されてゐたため、今や共榮圈建設の大業を完遂せんとするに當り、その正確なる知識を普及することが目下の急務となつたのである。三省堂はここに見る所あり、曩に專攻の學者に委嘱して南方の地誌・歴史・民族と民族運動・言語と宗教・慣習と藝術及び日本の南方發展史の六篇を編纂し、これを順次發行するに至つたことは、最も時宜を得たる事として衷心より慶祝する所である。

南方發展の先驅者の偉業を追懷し感ずる所を陳べて以て序とする。

昭和十八年四月

村上直次郎

本篇執筆者

概説	フイリッピン史	佛印史	タイ國史	マライ史	東印度史	ビルマ史	印度史	濠洲史	ニュージランド史
文學博士 村上直次郎	經濟學博士 井出季和太	明治大學講師 岩村成允	陸軍司政長官 郡司喜一	東亞研究所 原徹郎	東亞研究所 原徹郎	滿鐵東亞經濟調查局 國本嘉平次	伊東敬	伊東敬	伊東敬

概 説

村上直次郎

目 次

西歐諸國東洋侵略の起原	三
第一章 古代の東西交通	三
第二章 イタリヤの東洋貿易	四
第三章 ポルトガルの東洋進出	六
第四章 コロンブスのアメリカ發見と西葡領境界線の設定	二
第五章 イスパニヤの比島占領	一四
第六章 オランダの南洋進出	二〇

第七章 歐洲諸國の南洋爭覇

二
三

フィリッピン史

井出季和太

第一章 スペイン領前のフィリッピン

元

第一節 政治組織

元

第二節 法律の施行

三

第三節 經濟文化

三

第二章 スペイン治下のフィリッピン

四

第一節 フィリッピンの發見

四

第二節 スペイン人のフィリッピン遠征

七

第三節 フィリッピン島の征服

四〇

第四節	スペインのフィリッピン統治	四
第一	建設時代	四
第二	頽勢時代	四
第三	革新時代	五
第五節	フィリッピンの對外關係	五
第一	對支關係	五
第二	對日關係	五
第三	對葡關係	五
第四	對蘭關係	五
第五	對英關係	五
第六節	判亂と革命	五
第七節	フィリッピンの獨立と米西戰爭	六

第三章 米國治下のフィリッピン

第一節 米國のフィリッピン建設と治績

第二節 フィリッピンの新獨立運動

第一 米國の統治方針

第三節 邦人のフィリッピン進出

参考文献

佛印史

岩村成允

序説

第一章 上古史

第一節 建國時代

七

七

七

七

八

八

允

七

允

允

鴻雁紀.....九

蜀氏(甌國).....九

趙氏(南越國・廣東時代).....九

第二節 支那各朝所屬時代.....九

漢所屬時代.....九

吳晉宋齊梁所屬時代.....九

第二章 中古史.....九

第一節 原始獨立時代.....九

前 李.....九

後 李.....九

第二節 隋唐に所屬時代.....九

第三節 紛爭時代.....九